冬――雪あかりの路＜２＞

ＲＡＮ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬――雪あかりの路＜２＞

【Ｎコード】
Ｎ０４１９Ｕ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
毎年恒例の小樽の雪あかりの路。
その祭りの中にとけこむ日常を描く。

※サイト、ｄノベ転載。

私、何やってるんだろう。

こうなることは、わかっていたじゃないか。
この日の、おまけに夕方なんていう時間帯だぞ。
夕方だけど、冬だからもう辺りは真っ暗だ。
運河には、チラチラと温かい光を放つ浮き玉に入ったキャンドルが浮かぶ。
そして、見事に降り積もった真っ白な雪。
本当は不純物がいっぱい入っていて、純白なんて言えた代物じゃないけど。
雪を食べるなんて、幻想もいいところだけど。
こんなムードに、カップルが来ないわけがない。
まさに恋人と過ごすにはうってつけの場所じゃないか。

そう、私の周りには、見事にカップルが溢れていた。
さっきまでは、観光客とかもいたはずなんだ。
いや、今もきっとどこかにいるのだろう。
あの広場みたいな所にはいるだろう。
だが、私は運河脇の道を歩いている。
ここもキャンドルが灯されていて、なかなかきれいなのだ。
そして、それを思うのは私だけではないので、かなりの人がいた。
これでは、雰囲気を楽しむどころの騒ぎではない。
人の流れについていくので精一杯である。
しかも、やっぱりカップルばかりだ。
若い人から高齢の方々まで。
どんな年齢層の方々がいても、だいたい男女一組だ。
こんな時は、友達と来ていたって切なくなる。

それが一人とあっては、少しやさぐれたくなる気持ちもわかってもらいたい。

何で私、こんな所に一人で来たんだっけ。
たぶん、何となくなんだろうな。
いつもそうだった。
気になると、つい足が動いていた。

私はいたたまれなくなったので、運河離れることにした。
一通り運河の端から歩いてきたし、北運河は少し人通りも少なくて、何となく行きづらかったので、もうここは離れることにした。
運河から駅に向かう途中で、また静かに明かりが連なる場所があった。
そういえば、手宮線も会場だったな、と思い、わき道にそれてみる。
雪のトンネルが作られ、ここにも、そこかしこにキャンドルが置かれていた。
トンネルを通る時に、キャンドルがすぐ脇にある感覚は、何だかわくわくさせられた。
ここにもカップルがいたが、運河よりも人通りが少なく、静かで居心地がよかった。
道が狭いのも、また雰囲気があった。
線路の上を歩きながら通るのは、不思議な気分だった。
いつもと違う全然知らない空間にいるみたいだった。
気づくと、明かりがない所まで歩いていた。
来た道を振り返ってみると、やはり温かい光はちらちら揺れている。

最後に、ここに寄れてよかった。
今度一人で来る時は、こっちに来ようと思った。

この空間だけは、私を一瞬だけ違う世界に連れていってくれる。

（後書き）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※舞台は北海道小樽市の冬の祭り、雪あかりの路。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0419u/

冬――雪あかりの路＜２＞

2011年6月15日14時56分発行